

四次元メレオロジーと存在論

中山康雄（大阪大学大学院人間科学研究科）

四次元主義のひとつの形態は、時間的段階を基盤にしたものであり、近年、サイダー（T. Sider）がこの考えをもとにした形而上学を提案している。これに対し、私がここで提案する四次元主義は、メレオロジーの拡張としての四次元主義であり、部分・全体関係が、四次元対象の把握にも、時間的対象の把握にも基礎となっている。私が提案する四次元メレオロジー（Four-Dimensional Mereology, 以下、FDMと表す）は、次の原則に基づいた存在論である：

- (1) 世界には、材料と運動（プロセス）がある。これらは、四次元的存在物である。（四次元的）部分・全体関係はどんな材料やプロセスにも適用できる。
- (2) 構造化された四次元的存在物を個別化するのに、述語を用いることができる。これらの述語は、「類述語」と呼ばれる。
- (3) 物理的対象や出来事は時間的部分を持つ。
- (4) 類述語の適用は、時間的部分に関する述語の適用と異なる。「太郎は人間だ」は類述語の適用であり、物理的対象を個別化するために使われている。これに対し、「太郎は学生だ」は、太郎の時間的部分に関する述語（可算名詞）の適用である。

本発表において、私は、これらの原則に基づき FDM を公理化するとともに、その背後にある存在論について考察した。また、物体と出来事存在論的類似性を、FDM を用いて分析できることも示した。また、本発表で、私は、次のような FDM の利点も指摘した：

- (5) FDM は、唯物論の立場を明確化し、実体論的議論をさけることができる。
- (6) FDM では、世界についての徹底化したメレオロジーが形式化されている。
- (7) 出来事も物体も四次元的対象とみなした統一的存在論を構成できる。
- (8) 出来事と物体の違いは、個別化の違いによっている。しかし、最終的には、物体と出来事は明確に分離できない。FDM は、統一的存在論によりこのことを説明できる。
- (9) 生物体の構成部分は、多くの構成物のプロセスとみなすことができる。また、固体、液体、気体などの物体の様態の違いは、構成物の運動状態の違いにより説明できる。このように、現実においても、物体と出来事は統一的存在論により説明されるべきものである。FDM の体系は、この物体と出来事との間の複雑な関係を分析するのに用いることができる。